共通テーマの意図するもの

満井秀城

今回の『浄土真宗総合研究』第十号の共通テーマを「伝灯奉告法要」とした意味については、特に説明を必要としないであろう。

言うまでもなく、一昨年（二〇一四年）六月六日に、第二十四代即如門主から、第二十五代専如門主へと、門主の「法統継承式」が行われ、本年（二〇一六年）十月一日より、いよいよ「伝灯奉告法要」が営まれることになっており、その意味や意義を再確認したいと願ってのものである。

「法統の継承」は、一般仏教では、「瀉瓶」（しゃびょう）とも称される。瓶に入っている水を、また別の瓶へと移すときに、一滴の過不足もあってはならないという意においてである。

立教開宗から、まもなく八〇〇年を迎えようとしている。この八〇〇年近くの間、浄土真宗の法義の内容そのものについては、宗祖親鸞聖人以来、一滴の過不足もなされてはいない。その一方、法義を伝える伝道のあり方については、覚如上人や蓮如上人を始めとして、さまざまな工夫がなされて来た。

たとえば、「平生業成」は、宗祖の著作には存在しない言葉である。しかし、そのことをもって、覚如上人や蓮如上人は、宗祖の法義に過不足を加えたのかというと、決してそうではない。

覚如上人や蓮如上人の時代、主として浄土宗を中心に「臨終業成」という語が広まっていた。この世から次の世へと生まれ変わるときには、臨終の時点で、それまで自らが行ってきた行業の善悪にしたがって、行き先が決まる

という考え方であった。これに対し、我々の行き先は臨終に決まるのではなく、平生聞信の一念に正定聚不退の位に定まるという、宗祖が明らかにされた「現生正定聚」の法義を、「臨終業成」への対立軸として「平生業成」と表されたのである。

親鸞聖人の時代と、今の時代とでは、何が異なっているだろうかを考えたとき、私個人の思いでは、「生死出づべき道」が課題になっているかどうかが、最大にして決定的な相違点だと考えている。「生死出づべき道」が課題にならない人には、「さとり」も「浄土」も響かない。そして、「浄土」が理解出来ない人には、「現生正定聚」という、宗祖が明らかにされた法義の意味や意義の大きさも、まったく理解できないであろう。

現代人は、少なくとも物質的には便利で快適に過ごしているために、今さら信心や念仏などなくても、何の不自由もないと考えているかも知れない。そういう人たちに、どう、ご法義を伝えていくのかが、今の私たちの課題だと思う。

専如ご門主が、「法統継承式」の折に発布されたご消息には、

本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていかねばならないでしょう。現代という時代において、どのようにしてご法義を伝えていくのか、宗門の英知を結集する必要があります。

とお示し下さっています。

このご消息のお示しを受けて、何ほどかでも「宗門の英知を結集」しようと試みたものが本論集の意図するところである。

この意図を具現化すべく、このたび、お二人の外部有識者の知見を得ることができた。

まず、蓑輪顕量先生からは、「日本仏教における継承と伝統」と題する特別寄稿を頂戴した。仏教本来としては、

教えの継承は僧伽が基本であったが、東アジア世界の伝統的価値観の影響を受けて、人的な継承へと視点が移行したとされる。その人的継承のあり方も、当初は「血脈」という擬似的親子関係であったものが、平安時代に貴族階層が参入することによって、家的な価値観が混入し、師弟関係が、まったくの親子関係と同一化されるようにもなって来たとされ、「伝統の継承」自体も、固定的ではなく、変化して来ていることが指摘された。

また、横山禎徳先生からは、我々編集部のインタビューの形式を通してではあるが、多くの知見の提供を頂戴することができた。「伝統とは、常に結果である」とのご教示を通して、現代社会のさまざまな諸相に鋭敏に反応・対応しながら、伝統を創出し続けなければならないとの思いを強くした。

両先生には、まずもって、甚深の謝意を述べさせていただきたいと思う。

以下は、当研究所に所属する研究員の論考を掲載した。

小野嶋論文は、蓑輪先生のご教示でも触れられていた、「東アジア仏教」という視点を通じての論考である。内向きの視点ではなく、広い視野でとらまえることを意図している。

次に、我々浄土真宗の立場から言えば、まず触れておかねばならないのは、覚如上人が提示した「三代伝持の血脈」という論理であり、これを扱おうとしたのが塚本論文である。

また、このたびの「伝灯奉告法要」を直接の対象として、岡崎・楠の両名が、異なった視点からの論究を試みている。

さらに、野村論文では、本願寺の寺紋の変遷が、門主の代替わりと、どう関連しているかを探った論考であり、堀論文では、歴代門主の業績の一つとしての「御蔵版の刊行」に焦点を当てた。

最後に冨島論文では、「論文」という形式からは、やや異質なスタイルではあるが、歴代宗主の事蹟を、右記の堀論文と同様に、主として聖教の開版に主眼を置きながら、時系列的に整理したものである。

このほか、当該テーマに直接関係するものではないが、在籍する研究生の年度成果を報告したものも掲載してい

る。読者諸賢の益するところとなれば幸いである。